

## 子育て支援ネットワークづくりを通して考えた 大学の地域貢献

飯田浩之

人間総合科学研究科准教授

### 子育て支援ネットワークの構築まで

今から3年程前のある日、研究室に来客があった。以前、「子育てサークル」についての調査を行った時にお世話になったお二人である。長年、つくば市で子育て支援の活動をしてきているお二人は、その時、次のようなことを話された。

「つくば市には、子育て支援に関係する機関・団体・サークルなどがたくさんある。しかし、個別に活動しているだけで、お互いに何のつながりもない。一緒に手を携えれば、より、大きな力を発揮できるし、お互いの力をつけていくこともできるのだが……。是非、研究室にお手伝い願いたい。」

それから2年後の昨年3月、「つくば市子育て支援ネットワーク かるがも・ねっと」が発足した。つくば市で子育て支援に携わっている機関・団体・個人等を会員とするネットワークである。この間、私たちの研究室は、本学「社会貢献プロジェクト」

の支援のもとで、市民の皆さんと手を携えて、「つくば市の子育て支援を考える」イベントを開催し、定期的に学習会を開き、支援にかかわる情報を集め、他市のネットワークを参観し、ネットワークづくりを進めてきた。そうした準備を経て、「かるがも・ねっと」は歩み始めた。それから1年。「かるがも」は、ヨチヨチ歩きではあるが、少しずつ活動の範囲を広げている。

ここでは、「かるがも」と研究室の関わりを紹介し、ネットワークづくりを通して考えた大学の地域貢献について記したい。



「かるがも・ねっと」ロゴ・マーク

## 「かるがも・ねっと」の活動と研究室

「かるがも」の活動の第一は、学習会である。学習会は、ネットワークづくりに着手した時からの活動である。学習会を開くなかで、ネットワークをつくってきたと言ってもよい。学習会には、「子育て支援センター」や「ファミリー・サポート」など子育て支援機関の方、公民館をベースに市の家庭教育学級を指導されている社会教育指導員の方、子育て支援団体や子育てサークルの方など「かるがも」の会員をはじめ、その他、広く子育て支援に関心のある方が参加している。ほぼ2ヶ月に1度の割合で、テーマを決めての開催である。当初は、互いの活動を紹介し合うことから始まった。現在では、共通の課題や問題がテーマである。最近3回は、「子育て支援の場における安全・安心」がテーマとなっている。

学習会への研究室の関わりは、企画や進め方について相談にのること、記録をまとめることである。支援の現状を少し離れたところからみて、学習を方向づけていく役割を果たしている。

第二の活動は、ニュース・レターの刊行である。学習会の記録を中心に、その都度、お知らせやニュースを掲載し、会の内外に送っている。A4版4ページ程度のものであるが、最新が15号。継続して刊行してくると結構な情報量になっている。

ニュース・レターについて研究室では、会員の協力を得て記事を書き、編集する作業を行っている。印刷・発送も研究室を中心に進めている。「かるがも」の会員は、それぞれ、直接、支援の活動を行っている。「かるがも」は「支援の支援」的な位置にあるのであれば、実働において研究室が頼りにされがちである。時々、研究室で、記事に関連する用語や出来事について調べ、「コラム」として載せている。それが「大学の顔」を見せる場となっている。

第三の活動は、子育て支援に関わる情報の収集と発信である。ネットワークをつくる過程で、つくば市にはどのような子育て支援の機関・団体・サークルがあり、どのような支援を行っているかを調査し、その情報を子育て中のお父さんやお母さんに提供できるよう、整理した。折から、市のこども課が「子育てハンドブック」の発行を企画していた。まだ、準備段階にあった「かるがも」と私たちの研究室は、その編集を引き受け、『つくば市子育て便利帳 子育てのわ 2005』を制作した。5,000部のハンドブックは、子育て支援センターや保健センター、市の窓口などで子育て中のお父さんやお母さんに配られた。

今年1月から、「かるがも」と研究室の提案で市のこども課が、「つくば子育てカレンダー」の発行を開始した。支援機関・団

体・サークルの毎月の活動予定を載せたカレンダーである。子育てに関係する公の機関を始め、小児科の病院などでも配布されている。提案した以上、「かるがも」も研究室も責任がある。編集作業は私たちで行い、印刷・配布は課と協力して行っている。



市との協力で生まれた「子育てハンドブック」

情報の収集・整理は、大学の得意とするところである。加えて、私たちの研究領域では、「調査」が研究方法となっている。資源調査の実施とそこで得られた情報の保存・蓄積は、私たち研究室の仕事である。

「かるがも」が大事にしているのは、互いの日常的なつながりである。このつながりをもとに、各機関・団体・サークルの協力が始まっている。つながりのなかから、例えば並木公民館に子育て中のお母さんの集いの場「オアシス」が誕生するなど、新たな支援も生まれている。

## 大学の地域貢献として

私たちの研究室は、このように、子育て支援のネットワークづくり、ネットワーク活動を通じて地域と関わってきた。この関わりは、個人としての関わりではない。あくまでも大学の研究室としての関わりである。である以上、常に大学の研究室として、どのようなスタンスで、どのような役割を果たせばよいかを考えてきた。

この間のことを振り返って思い至るのは、地域全体を視野に、支援全体を構想することに果たす私たちの役割である。私たちの試みが「ネットワーク」に関わることであったからかもしれないが、常に考えなくては思っていたのは、つくば市という「地域全体」であり、子育て支援という「支援全体」である。「かるがも」に参加している支援者たちは、それぞれがそれぞれに持ち場を持っている。自らの持ち場で熱心に活動を続けている。しかし、その分、持ち場を離れて発想しにくいところがある。研究室に課せられたのは、支援者が持ち場を越えて発想できるようにすることである。「地域全体」「支援全体」を見渡す視点の提供である。十分に成し得たかどうかは別として、心したつもりである。

このことは、一步離れた立場にいることの大切さでもある。全体を見渡せるのは、そうした立場にいればこそである。利害関

係に巻き込まれず全体を調整できるのも、不即不離の立場にいることによる。この点は、大学が地域に関わる際の基本となろう。

一步離れた立場でいることは、実践に関わりつつもそれに留まらない姿勢をとることでもある。大学は研究の場である。この試みに携わりながら私たちは、一步離れてネットワークの理論的な検討を行った。その上でネットワークづくりの方策や方針を提示した。そして実践を通じて検証を行った。結果として「かるがも」も育ったし、私たちも育ってきた。研究室の研究に資することにつながった。

私たちと地域との関わりは、「大学の研究を地域に生かす」という一方的な関わりではない。「大学と地域が協働し、双方が力をつける」という実践的、双方向的な関わりである。私たちは地域に出て、市民の皆さんと一緒に活動した。そこでは私たちが地域に貢献するだけでなく、地域も私たちに貢献してくれた。このことも忘れてならないことである。

一連の試みのなかでこれこそが大学の貢献と思われたことは、研究方法の活用である。具体的には「調査」という研究方法が、子育て支援資源の把握、情報の収集・整理に有効だった。学問はそれぞれ「方法」を持っている。「研究のための方法」を「実践のための方法」に応用するなかで、地域に

対する大学の貢献を実感した。

さらに、大学が関わることに意味があると感じたのは、そのことで行政とのかかわりが円滑にできたことである。つくば市には、大学の研究室が協力しているということで、「かるがも」への理解を深めていただいた。先に紹介したように、一緒に「ハンドブック」や「カレンダー」を作ることもなった。大学とつくば市が結んでいる包括協定が大きな後ろ楯となったことは言うまでもない。行政と市民の間に大学が入ることの意義、これも一連の試みのなかで感じたことの一つである。

「かるがも」の活動は、今後も続いていく。そうすべきだと考えている。上に記した以外に、地域に対する大学の貢献として期することも、まだ多い。しかし、どこまで私たちの研究室がこの試みに関わっていくか、これからの関わりをどうするか、迷いもある。大学の地域貢献として私たちは「かるがも」の誕生に力を貸してきた。だが、あくまでも「かるがも」の主体は市民である。今後、私たちがしなければならないことは何か。目下、私たちにとって、その点の見極めが課題である。

(いいだ ひろゆき／ヒューマン・ケア科学、共生教育・教育社会学)